

タコス
VS
ケバブ。
。

宮本武蔵といったら佐々木小次郎と言われるように、タコスといったらケバブ。これは太陽が東から昇って西に落ちて行くことと同様に、疑いようがない。このことは普通の事実である。

第一部 出会い

2人の出会いは大学内であった。同じ学部、同じサークルに属する、ただの知人だった。そう、あの時までは。ある時、片方が「タコス」と呟いた。そうなるともう片方が「ケバブ」と呟くのは必然である。お互いが「こいつは俺を理解してくれる」、そう思った。お互いを理解し合う2人の内に、徐々にある意識が芽生え始める「絶対にタコス（ケバブ）の方がケバブ（タコス）より優れている。」2人は決着をつけなければならぬ。その時が迫っていた。

9月某日。群馬大学にて

「おはようございます。」2人の会話は、敬語付きの挨拶から始まる。そして目を伏せ、息を思い込み吸い込み、軽く咳払い。これが2人のルールだ。

「タコスが……」沈黙を破る酒井の一言に、張り詰めていた空気が一層ピリつく。これから闘いが始まるのを予見した



のか、川田の目が見開き、室内は異様なムードに包まれる。彼はおもむろに手を鞆にやり、不気味な笑みを浮かべながら、「トルコのごはん」なる絵本を取り出した。これから2人の対談が始まる。

川田「さて、まずケバブについて基本的なことをだな……」

酒井「不要だ。」

川田「何？何事もまずは基本から入るのが」

酒井「問題ない。」

川田「お前、その唇のテカリ具合、間違いない。ケバブしてきただろう？そういうことか！たべていたのか既に。」

酒井「そういうお前も白いシャツが汚れているぜ、真っ赤なサルサソースでなあ！」

川田「ふうん……お互い相手の研究にぬかりはないようだ。」

酒井「そういうわけで、序盤から飛ばしていくぜ。」

川田「ー来い。」

第一部「出会い」完。

酒井優

どんな場所でも己のペースを貫く彼は強烈なスパイスのような存在だ。どんな人に対しても思ったことは臆せず発言する。その強烈なキャラクターに卒倒してしまう人も多いとか。そんな彼はひよんなことからタコスが生涯のパートナーに。「45日刊新聞の裏面は、タコスまみれにしてやるよ！」

川田和樹

頼れる右腕タイプで、好きな言葉は潤滑油。ルールを守ることに忠実であるがあまり、むしろ輪を乱すことがある。それが彼の生き方だ。その一風変わった性格から、早くも就活の面接に危機感を募らせる大学二年生。そんな彼は、ひよんなことからケバブに夢中。「45日刊新聞の裏面は、ケバブまみれにしようかな。」



酒井「へアッ！」

川田「君は何をしている」

酒井「トルティーヤを焼くタコス屋台のおじちゃんごっこ」

川田「フツ、(笑)」

「川田が笑みを浮かべたその刹那、酒井の体にメキシコの人格が憑依する——酒井「野郎ども、焼きあがったか！よし、どうもこしの粉100%で作った純正コーントルティーヤの出来上がりだ！タイプはもちろんソフトシェル。お口いっぱいに広がるコーンの風味を存分に味わってくれよな！」

川田「おい」

酒井「その可愛いお嬢ちゃん、今から仕上げに入るぞ。まずは好みのサルサソースを選んでくれ。おーっと、戸惑う姿もキュートだね、これが本場のやり方さ。お客さんのお好みに合わせて、ソースやレタスなんかのお好みを調節できる！んで、どうすんの？ソースは、"サルサ・ランチェラ"でいいのかい？ちとヒリツとするから気を付けな。よーしOKだ。肉、野菜をトングを使って……」

川田「おい！（駄目だ、入りやがった）」

酒井「挟むなんて馬鹿なことはいしねえ。まず、空中に具材を投げ出す！くうーっ、滴る油がいつみても鮮やかだ。こいつらが地面に落下する直前、自慢のトルティーヤでキャッチ！これが屋台で生きる人間の美技。どうだ！わあーっはっはっはっは。また来てね！君と僕はタコスでつながったアミーゴ！」

川田「おいと言っているだろう(怒)」

酒井「すまない、取り乱した。」

川田「素晴らしい。どうやら、タコス店の空気と、ケバブ店の空気には類するものがあるようだね。(ああ、ケバブサーベルの話がしてえ……。)」

酒井「何やら話した気だな。トルティーヤについて喋り倒したところはあがあるが、一旦君に場を譲ろう。存分に解放したまえ。」

川田「シュウイン、シュウイン。」

酒井「僕の話、聞いている？」



川田「シュウイン、シュウイン。」

酒井「……お前、なんだその動きは？」

川田「ドネルケバブ屋で回転する肉塊を切り落とすナイフ、いやサーベルがある。これはね、そのサーベルを研ぐ真似だよ。」

酒井「ふん。お遊びもそこまでだ。」

川田「お遊びじゃない。これは非常に重要な行為だ。お客さんはこのサーベルで肉塊が切られるのを楽しみにしている。」

その準備段階として、このシュウインと研ぐ動作が必要になる。あと、見た目が派手だから、お客さん呼び寄せるパフォーマンスにもなる。つまり、料理においても客引きにおいてもこの行為は大活躍するんだ。」

酒井「なるほど。この派手な動きがタコス店の空気と、ケバブ店の空気に類するものだったか。」

川田「そうだね。そして、このサーベルでケバブはもちろんそれを包み込むピタも切ることができる。」

酒井「実用性があるな。」

川田「それにしても、あんな薄っぺらいタコスの皮にケバブサーベルをあてたら、一瞬で散り散りだろうな。」

酒井「今君は、タコスを包み込む皮、トルティーヤをあんな薄っぺらい皮だと言ったな。確かにドネルケバブのピタよりも薄いのは事実だ。しかしピタよりも圧倒的に優れているんだな、これが。」

川田「何？まあいい。そういえばトルティーヤについて喋り倒したいと言っていたね。どうぞ。」

酒井「ケバブのピタはただのピタではない。タイプとしては1つだな。だが、トルティーヤには2つのタイプがある。」

川田「2つ……だと！」

川田の驚愕した表情を見て、酒井は一步前に出た。

酒井「トルティーヤ！」

川田「(どこから出したんだ……。) 御託はいい。始める。」

酒井「今俺が持っているのが、モチツとした食感特徴の『ソフトシエル』で、これがトルティーヤを油で揚げた『ハードシエル』パリツとしていて美味いぜ。」

川田「あ、うん。二種類あるんだね」

酒井&川田「……。」

川田「で、なんだよ。それで終わりか？ シュウイン、シュウイン……。」

酒井「サーベルを置け。」

川田「回転する肉塊に、このサーベルを！」

酒井「では、言わせてもらおう。ピタに種類はあるのか？」

川田「(ピタツ。)」

酒井「回転する肉、サーベルパフォーマンズ。それもいいが、お前らは肉を包みこむ皮、ピタに盲目だ。」

川田「ふ、ふざけるな。提供する前にはきちんと温めホカホカ！小麦の豊かな味わい……！ そ、それに」

酒井「たわけえ！」

川田「(ゴクツ！)」

酒井「『ブラワートルティーヤ』というものがある。これは、小麦粉とトウモロコシ粉を両方使うんだが、その分量で食感が変わる。そして、これを揚げるのか、揚げないのか？味の分岐、広がり。ああ、悩ましい。悩ましいぜティーヤ……。」

川田「認めよう。味の種類、食感という点で、俺たちは甘かった。」

酒井「あとは香りだ。お前らは肉とソースで客を引くが、俺たちはそこに焼き立てトルティーヤからくる、コーンの風が！」

川田「(調子に乗るな。教えてやるよ。ケバブの神髄をな。)」

川田「認めるよ。トルティーヤの方がケバブのピタよりも優れていることを。外側の勝負では負けた。でも、内側の勝負では負けない。」

酒井「ほう。話してみな。」

川田「ドネルケバブのピタに包まれる肉。これはサーベルによって食べやすい大きさにカットされ、味わいも最高だ。そしてここに、タコスよりも優れているものがある。」

酒井「なんだそれは？」

川田「食感だよ。人はね、肉に食感を求めるのさ。君は味も香りも最高、でもゼリー状のような食感のない肉を食べようと思うかい？」

酒井「肉に食感がないのは嫌だ。」

川田「だろ。僕にとつてはね、タコスの肉がそれなんだ。ドネルケバブの肉に比べれば離乳食みたいなものさ。肉には歯ごたえがなきゃ。」

酒井「確かにドネルケバブの肉に比べれば、タコスの肉は歯ごたえが弱いな。だ

がドネルケバブの肉は食べやすいがゆえに1つ1つが小さくないか？」

川田「それを解消するケバブの神髄がある。それは、シシケバブ。」

酒井「シシ……！」

川田「串に肉を刺し、焼き鳥のように焼く。ここにはピタやそれに包み込まれる野菜やソースがない。あるのは肉だけ。ただ純粋に肉を味わうためだけのものさ。これが神髄たる所以さ。」

酒井「肉だけを存分に味わおうつてのか。贅沢すぎる。」

酒井・川田「はあ、はあ。ごっほん。はあ、はあ。」

酒井「……いったんここで落ち着こうか。」

川田「……そうだね。」

酒井「タコスについて語る時、僕は常に

気を抜けない。だから少し疲れてきたよ。君はどうだ？」

川田「まったくだ。君のタコス力には恐れ入った。少し間を置きたいところだよ。」

酒井・川田「……にしても、タコス、ケバブって深いな！」

酒井「ケバブサーベル？だっけ。」

川田「サーベルがどうした？シュウイン……」

酒井「そのまね(笑)。サーベルを持ったドネルケバブ屋台の店主の動き、間違いなく客を引き付けるよね。お互い、味だけではないんだよ。視覚、嗅覚、聴覚に訴えかけてくるというか。」

川田「僕もそう感じていたところだよ！お互い味は確かだが、ケバブ・タコスの魅力はそこにとどまらない。心躍らせる



店主のパフォーマンス、それを引き立て

るソース、トルティーヤ、肉のかぐわしい香り……僕たちの胸を高ぶらせる。癖にさせるううう！」

酒井「店の空気を吸うだけ、屋台周辺の空気を吸うだけで、もう既にうまい。」

川田「個別にみると、トルティーヤとピタみたいな差異はあるが、本質は通じるものがあるのかもしれないね。君の話を聞いていて、そう思ったよ。」

酒井「同感だ。君(ケバブ)と僕(タコス)は、似ているのかもしれない。」

川田「一時休戦しようか。僕は、タコスについても深めたい。君も、純粋にケバブをもっと知りたいんじゃないか?」

第三部「実によく似ている」

川田「……今更なんだが、タコスの発祥の地ってどこなんだ?」

酒井「メキシコだ。」

川田「メキシコというと、北アメリカ南部の方か。」

酒井「ケバブはどうなんだ?」

川田「中東地域だね。でも柱となるのは、世界三大料理の1つ、トルコ料理の後ろ盾を持つ、トルコかな。」

酒井「トルコ料理って世界三大料理の1つだったのか。知らなかった。興味が湧いてきたよ。メキシコにもメキシコ料理というものがあつてだな。」

川田「なるほどね。じゃあさ、メキシコ料理とトルコ料理について調べてみて、共通項なんて探してみないか。」

酒井「いいね。そうすれば、それらの料理が背景にあるタコスとケバブの共通項も分かるかもしれないからね。」

川田「よし、じゃあ早速……」

酒井「待て。今調べてみたが、メキシコとトルコ、距離にして11785キロメートルだそうだ。」

川田「と、遠いなあ。」

酒井「……なあ。こんなに離れていて本当に共通項があると思うか?」

川田「……それに、お互い文化圏も、隣国も、たどってきた歴史も違うね。」

酒井・川田「……」

川田「似ていると感じた、僕たちの直感を信じてみる?」

酒井「そうだな。まあ、取り敢えず調べてみようか。」

川田「うん。」

酒井「zzz……」

川田「君、やる気はあるのか?」

酒井「ふぁーあつ(大きなあくび)いや、メキシコ人の習慣である“シエスタ”をしていた。」

川田「は?」

酒井「まず、メキシコについて簡単に説明しよう。正確な国名を、『メキシコ合衆国』という。陽気な人が多く、北アメリカ南部に位置。ちなみに、首都はメキシコシティだ。」

川田「で、肝心の食文化の方は?」

酒井「うん。『トルコ料理は世界三大料理の一つだ。』と君は言ったね。メキシコ料理も立派な看板を持つている。実は、メキシコ料理それ自体が“無形文化遺産”に登録されているんだ。」

川田「な、なに、世界遺産だって。それは知らなかった。それほどに、文化的な価値が認められているんだな。奥深そう。」

酒井「フフ。そして、メキシコ料理を語る上で最も欠かせないもの……それは、トルティーヤとサルサだ!」

川田「(前にも聞いたような気がする)。」

酒井「メキシコ料理の基本的な考え方は、『トルティーヤをどうするのか?』というところにある。」

川田「トルティーヤが主食だ。ということだな。」

酒井「うむ。やつらは、そこに料理脳を使うのだ。『シンクロニサダス』、『ウエボス・ランチェロス』そして『タコス』。どの料理も、トルティーヤという強靱な土台の上に、各々のテイストが加えられている。」

川田「ごはんと○○、この○○を埋めるのがメキシコ料理だ。と?」

酒井「そうだ。無論、トルティーヤを使わない料理もあるが、それは少数派。」

酒井「次サルサの説明いくぜ。繰り返すが、メキシコ料理といえばトルティーヤとサルサが欠かせないからね。」

川田「頼む。」

酒井「サルサというのは、タマネギ、トマト、パクチー、ニンニク、トウガラシ等の具材をみじん切りにして塩を振り、そこに果汁をぶち込んだものだ。」

川田「えらく単純だね。」

酒井「ちと、これを見てもらおう。右から、ハバナロ、ハラペーニョ、ウアヒー

ジョ、チレパスウィージャ……。川田「やけに種類があるようだけれど、これは?」



▲ハラペーニョを使用した、タコス の図。

酒井「サルサの主役、唐辛子たちだ。メキシコ料理の特徴は「辛味」なんだが、それはサルサに使われる唐辛子によるものでね。」

川田「つまり、サルサ（唐辛子）が味を握っている。」

酒井「うん。メキシコ料理の味付けは、サルサソースによるものが多い。画一的な味で飽きないの？と思うかもしれないが、それは問題ない。」

川田「というと？」

酒井「一口にサルサと言っても、どの唐辛子を使うかで辛味の度合いも違ってくるし、使う野菜だつて先にあげたものに限らん。ある意味、サルサの組み合わせは食材の種類だけあり無数だ。」

川田「家庭ごと、店ごと、それぞれにサルサの作り方に癖がありそうで面白そう。」

酒井「そうだね。メキシコ料理について簡単にまとめると、主食はトルティーヤ

（トウモロコシ）で、味の特徴は唐辛子から来る辛味。サルサは国民食！というところかな。」

酒井「おい。ドネルケバブと言えば、最近屋台でヨーグルトガーリックなるソースを見たんだが。」

川田「ああ、あれね。」

酒井「どうしたドネルケバブ。お前らのソースは辛さを売りにしているものだと思っていたが。」

川田「おっと。知らないんだつた。トルコ料理にはヨーグルトが頻出だよ。」

酒井「何？」

川田「アイラン。これはトルコで愛飲されている。」

酒井「つまり、飲むヨーグルト的な？」

川田「塩や水、場合によっては胡椒を入れたりもするから、純粹な飲むヨーグルトではないけど、だいたいそんな感じだね。酸味があつてさっぱりしているから、肉料理との相性もばっちりさ。」

酒井「肉と飲むヨーグルトか。試してみたい組み合わせだな。」

川田「そして何より、ドネルケバブの核肉の下準備にも使われることがある。」

酒井「ソースだけじゃないのか！」

川田「ヨーグルトを肉に塗り込むことによつて、やわらかくすることができるとだ。」

酒井「飲料に、そして何よりドネルケバブにも関わっているとはな。知らなかった。トルコ料理において、ヨーグルトは万能なんだな。」

川田「そうなんだよ。さて、次は何について話そうか……、つておい、どうした。」

酒井が腕を組み、険しい顔を浮かべていた。

酒井「僕たちは似ている、と言つたな。」

川田「ああ。その裏付けのためにお互いメキシコ料理とトルコ料理についてここまで語ってきたんだらう？」

酒井「僕はさ……。僕はさ、気付いてしまったんだよ。」

酒井・川田「……。」

酒井「なあ、なんで『似ている』なんて幻想を抱いた？」

川田「ああ……。あの時、僕はどうかしていた。君のタコス力、僕のケバブ力をぶつけ合った結果、『タコスとケバブは似ているかもしれない！互いのルーツである、メキシコ、トルコ料理について調

べて検証すれば、何か共通項が出てくるだろ！』と思つていた。」

酒井「結果は明白だ。振り返る間もない。」

川田「ああ、僕たちは……。」

酒井・川田「全く似ていない。」

酒井「俺たちは妥協していったんだ。疲れた俺たちは、この『タコスvsケバブ』という対談を『両者似ている』『引き分け』などという、安易な結論で締めくくろうとしていた。」

川田「認めたくない。だが、現実だ。」

酒井「俺たちはメキシコ料理、トルコ料理の文化について調べ、それを検証し、共通項を洗い出そうとした。そうすれば、先の結論でこの対談は終了するからね。」

川田「でも、そんな弱気でどうするの？」

酒井「タコスだぜっ！」

川田「パワフル、けばーぶー♪」

酒井・川田「頭が……おかしいッ……。」

川田「トルティーヤ、サルサ？フッフ

…… 共通項なんてあるわけねえだろ。（キレ気味）」

酒井「エキメッキー？ヨーグルト？おい

おい、どこがメキシコ料理と共通だよ。ハイハイを始めたばかりの赤ん坊にも、一瞬で判断がつくぜ。類似はない。バカか？」

川田「俺たちの共通点なんて、日本語にすると、愉快なリズムを生むカタカナの羅列だ。つてことだけだよ。」

酒井「刀を抜け……。決着をつけるぞ
……。」

川田「シユウイン。」

酒井「一つ言っておく。」

川田「一つだぞ。」

酒井「俺たちの、絶対的かつ客観的な共通点。それは、『カタカナ三文字』ってことだ。」

川田「君、時間稼ぎはよくないよ……。」

僕はね、もう、うずうずしているんだ。

はやくはじめましようよ……。」

酒井「(スイツチ入ったな。ん？今まで

気が付かなかつたが、奴のケバブサーベル

についている赤い斑点と、チ、チーズ

……!?ま、まさかッ……。)」

川田「どうしたんだい？シユウイン！」

酒井「貴様、まさかブリトローを、あの、

ブリトローを、手にかけてたというのか？」

(※ブリトローとはタコスによく似た料理
です。)

川田「うん。彼は実に手ごわい相手だっ

たよ。思い出すよ。チーズで必死に戦っ

てきてね。そういえば、やつもトルテ

ィヤの一味でしたね。」

酒井「ブリトローはいいやつだった！いつ

もイレブンに付むあいつは、深夜の仕事

帰りの俺を癒してくれた存在。それは他

でもない、ブリトローだった！ブリト

ロー、お前、だったんだ……。」

川田「君はブリトローのなんなんだい(笑)」

酒井「俺が、ブリトローだッ！」

川田「は？」

酒井「おいケバブ。小細工は抜き。回り
くどいやり方はなしだ。『正面衝突』で
いく。」

川田「勝負の仕方はなんでもいい。で、
正面衝突というのは具体的に？」

酒井「俺であればタコス、君であればケ

バブを細分化し、互いの構成要素に綿密

に分解する。肉、野菜、ソースなどが出

てくるだろう。その一つ一つを部門ごと

に競わせ、最終的な勝利の数で判定をつ

けようじゃねえか……。互いの優越に

な。」

酒井「最初の部門は、皮。つまり、トル

ティーヤとピタで雌雄を決する。」

川田「……。」

酒井「お前は以前、俺がピタをトルティ

ィヤで倒そうとしたとき、とっさにシシケ

バブを出すことによつて逃れていたな。」

川田「(ギクッ。)」

酒井「この場ではつきりとさせよう。ト

ルティーヤはピタよりも優れている。」

川田の心拍数、上昇ッ！

川田「ピ、ピタには肉や他の具材を包み

込む強靱さ、歯ごたえがある。」

酒井「歯ごたえ？前にも言ったが、トル

ティーヤは小麦粉とトウモロコシ粉の配

合により自在に歯ごたえ⇨食感を調節す

ることが可能だ。さらに、揚げるか揚げ

ないかでソフトとハードに分岐する。二

度も言わせるな。」

川田「で、でも……。」

酒井「見苦しいぞ！引き際も肝心だ。し

つこいケバブは嫌われる。」

川田「まだだ！やってみなけりゃあ、結

果はわからないんだよお。」

川田、ピタを射出。

酒井「あ、コバエだ。(笑)」

酒井、右手からソフトタイプを放出しハ

ィエを打ち落とす。すぐさま左手を構えて

ハードタイプを放出。から空きになった

川田のボディィーへ強烈な一撃をくらわ

す。





酒井「出てこなければやらなかつたに。」
酒井、勝負がついたと判断し場を後にする。

川田「完全敗北だ。あいつ、トルティエヤにサルサソースを仕込んでいたな。お陰で僕の白シャツは真っ赤だよ……。」

この日以降彼は毎朝目を覚ました後、洗濯されないまま放置してあるこのシャツを眺める。・負けた悔しさ・を忘れないために。

次の日の朝

酒井「ここは、どこだ？」

目隠しをされた酒井がとある場所に案内された。

川田「もう目隠しを取っていいぞ。」

2人は広大な野菜畑の中に立っていた。

川田「この畑は、タコスやドネルケバブのような料理で使用する野菜がなる畑だ。季節、昼夜を問わずにな。」

酒井「し、信じられん！」

川田「僕もね、ある人間に連れられ初めてここを訪れた時、君のような目をしていたよ。」

酒井「それにしても不思議な畑だ。」

川田「ここは特別でな。タコスやケバブを真に愛する者が耕作することによって、別次元から野菜を呼び出す事ができる、夢のような畑なんだよ。」

酒井「し、信じられんツツツ！」

川田「疑うなら試してごらん。取り合えず、縦1メートル、横1メートル耕してごらんよ。それが異次元から野菜1単位を召喚するのに必要な対価となる。」

酒井「望めば手に入らん。というわけか。」

川田「さあ、耕せ！世は大耕作時代！」
酒井は鋤を手にとり、彼の言葉に沿って振り下ろす。ーザツ、ザツー すると、

普段滅多に目を見開かない酒井の目が、目が、トルネイド！グルングルン回って、彼はその場にひれ伏す。

川田「どうだ！すごいだろう！」

酒井「きゃ、キャベツだと!？」

川田「それをかじってごらん。」

酒井「う、うめえ〜！」

川田「一つ言っておこう。僕はね、ここでブリトーを倒した。」

酒井は手に持っていたキャベツを、置いた。楽しげだった場のムードは一変し、突如、暗雲が立ち込める。降りはじめた雨の雫は、ブリトーの涙か。

川田「勝負の方法を説明しよう。」

酒井「来い。ブリトーの仇だ。」

川田「まず、3つのベジタブルを選べ。」

酒井「キャベツ、トマト、レタスでいいか……」

川田「(キャベツ、トマト、レタスしかない……)」

川田「では、1ターン目。最初のベジタブルを召喚しな。」

酒井「トマト！君に決めた！」

川田「俺は、耕作した土地3平方メートルを使って、トマトを呼ぶぜ！」

酒井・川田「か、被った！」

酒井のトマト「トマーツ。」

川田のトマト「トマトマ！」
酒井「で、どうする？」

川田「このまま。」
酒井のトマト「トウマツ！」

川田のトマト「トウトウマツト。」

トマト同士の殴り合い。おや、川田のトマトの動きがのろく……いや、違う。酒井のトマトが加速しているんだっ！
勝者は酒井のトマトだった。

川田「どうしてこんなことに!？」

酒井「いいか、よく聞け。トマトつてのはな、南アメリカ大陸のペルーやエクアドルが原産地だと言われている。」

川田「……?」

酒井「タコス発祥の地、メキシコ共和国がどこに位置していると思う?」

川田「ハッ！き、北アメリカ大陸だ……!」

酒井「ご名答。トルコは西アジアの国だったな。そこよりも原産地に近いというのが、今回の勝因だと俺は分析するぜ。」

川田「強引な理論だ！」

酒井「理論はとってつけた程度。実際のところはコレさ。」

川田「そ、それは肥料！まさか耕す時に土の中につ！」

酒井「俺が一枚上手だったようだな。」

川田「ええい！次だ！」

川田「次で勝負をかける！レタスとキャベツを同時に召喚する。」

酒井「タッグマッチか。なら、俺もレタスとキャベツを呼ぶぜ。」

酒井・川田「か、被った!」

赤コーナータコスサイド、青コーナーケバブサイド、両陣営による野菜タイトルマッチ、決戦のゴングが鳴る。開始わずか2秒、双方のレタスが地に伏した。

酒井「な、何が起きた?引き分けということなのか?立ち上がれ!立つてくれ!せめてキャベツにタツチを!」

川田「そう焦るな。葉物野菜の勝負は直の殴り合いじゃあないんだ。」

酒井「はあーっ! (気合とタコス力で生き返らせる!)」

川田「だから、落ち着きたまえ。まあ見ているごらんよ。」

突如、畑に潜んでいた青虫が、川田のレタスに向かって一直線に這い出した。

酒井「ん?これはどういうことだ。俺のレタスには向かってこないのに。」

川田「レタスは、トルコが属する西アジアが原産だからじゃないか。」

川田のレタスは消えた。場には、幸せそうな青虫と酒井のレタスが残る。

酒井「なるほど、虫に売れ残ったおれの負け。いい勝敗のつけ方だ。」

川田「これで一勝一敗。」

酒井「キャベツ。次がファイナルマッチだ。」

川田、スマホを取り出す。

酒井「お前、何をしている。」

川田「キャベツの原産地を調べて……あつ。」

酒井「これ、原産地で勝敗が決まるんだね(笑)。」

川田「ヨーロッパだって。」

酒井「……。」

酒井「じゃあ、野菜決闘ベジタブルは続行不可。野菜部門は一勝一敗で引き分けだな。」

川田「やむなし。」

川田「ついにこの時がきた。待ちきれなかったよ。」

酒井「俺もだ。君の核である肉を倒したら、ドネルケバブという存在はタコスの前では塵も同然になってしまっただろうよ。」

川田「ありえんな。前にも話したが、お前の離乳食のような肉など相手にならん。」

酒井「お前のタコスの肉についての固定観念、変えてやるよ。言っておくがこれは勝利宣言だ。」

川田「へえ(笑)。せいぜいチキン、ポークとビーフの3種類の中から選べる〜とか、そんなもんだろ。調査済みだ(どやあ)。言っておくがこつちも選べるぞ。チキン、ビーフ、羊肉の中かな。さあ、どうやって俺を倒すんだあ。ええん。」

酒井「君はタコスを、ほんの『イチブ』

しか知らない。『ひき肉が離乳食。』これに抗議をしたところだが、まずは別の観点を提示しよう。タコスで使う肉は、挽肉だけとは限らないんだ。」

川田「理解不能。理解不能。」

酒井「これだから日本人は(笑)。」

川田「(君もだろう)。」

酒井「いいか、挽肉が主流なのは『テキサス・メクス』だ。」

川田「てくすめく、す?」

酒井「タコスはメキシコ発祥の料理だが、それが世界に広まると、メキシコ本来のテイストと異国の文化が混ざり合い、新たな解釈が生まれる。料理だけに言えることではないが、料理において顕著にみられると思うよ。この傾向。」

川田「うん、同意。ケバブと言うと、ピタで包まれたケバブサンドやドネルケバブをイメージする日本人が多い。そういう奴らは本場トルコに行くと、さぞ驚くだろう。」



第4部 「肉と文化」

川田「で、テクスメクスとはなんだ？」
酒井「歴史を語ろう。まず、メキシコ料理がアメリカに伝わった。メキシコ共和国とアメリカ合衆国は地理的に近いし、理解できるな？」

川田「うん。日本でケバブできるほどだしね。」

酒井「そして、メキシコ料理の代表たちはアメリカ風のアレンジがなされる。例えば、タコライスってあるだろ？あれは、メキシコ料理のタコスが、日本のコメと結びついてできた料理だ。」

川田「うんうん（ケバブ丼もあるよ）。」
酒井「こんな風に、メキシコ料理にアメリカ成分が加わってできたのが、テクスメクス料理」というジャンルだ。」

川田「それが挽肉とどう関係する？タコスと言えば挽肉でしょう。ちんけな食感の挽肉でしょう。」

酒井「『挽肉が主流』これはテクスメクスに当てはまる。が、本場では主流でないのだ。」

川田「うそこけ、うそこけ。」

酒井「本場メキシコに行ってみる。君の言う『ゴロゴロとした肉』がトルティージャの中にサンドされている。本場では、これが普通だ。」

川田「日本じゃ挽肉しか見かけないの

に！」

酒井「そうだ。日本では、テクスメクス料理方面が、本来のタコスであるという風潮があるからね。ちなみに、ハードタイプのトルティージャもアメリカ産だ。まあ、君のような人間がいても仕方ない。誤解が解ければ幸いだ。」

川田「ふ、ふん（震え声）。やつと噛みごたえのある相手になってきたなあ、タコスよ。」

タコスとケバブを細分化し、勝負する酒井と川田。日本で見えるタコスはテクスメクスだった（挽肉が包まれている）。本場ではドネルケバブと同じように、肉がゴロゴロしていた。

酒井「さて、もう肉における優位性はないな。」

川田「ええ？」

酒井「本場のタコスの肉は、ケバブと同じように噛みごたえのある肉だからな。離乳食を引き合いに攻撃できなくなっただけだ。」

川田「調子に乗るなよ。」

酒井「好きに話してみろよ。」

川田「そうしよう。まず日本の話からだけど、ドネルケバブは秋葉原を中心に広がりを見せている。」

酒井「都会からなんだね。」

川田「どうして異国の料理が広がったのか。これはいろいろな要因があるだろう。日本風にアレンジされたとかね。」

酒井「ドネルケバブ屋で甘口のソースがあるとか、日本っぽいよね。」

川田「それね。でも、一番の要因はドネルケバブがファストフードだということが関係している気がしてならない。」

酒井「知らなかった。」

川田「ドネルケバブはね、ファストフードとして、トルコだけならず、ドイツを中心にヨーロッパでも大きな広がりを見せているんだよ。」

酒井「世界ドネルケバブ化計画。」

川田「だけど、勘違いしないで。ファストフードと言っても栄養価が高い。」

酒井「炭水化物、野菜、たんぱく質が取れる！」

川田「この中で肝となるのが、ご存知肉なわけだが。」

酒井「前から思ってたんだけど、パフォーマンスのために肉をわざと大きくしているんだろう？」

川田「そうかそうか。じゃあ、教えてあげよう。どれだけの手間がかかってあの肉が店頭に出て、回転しているのかを。」

酒井「さあ、教えてくれよ。あの回転する肉にどんな手間がかかっているのかを。」

川田「あの回転する肉、お前にはどうい

う形状の肉に見える？」

酒井「巨大生物の足。」

川田「そうそう。ケバブマンモスの足なんだ。ドネルケバブを作るためにはこいつを狩らなきゃあならねえ。」

酒井「捕獲レベルは？」

川田「巨大マグロと同レベルだ。奴らはよく回転するからね。」

酒井「スピンスピン！熟練者が必要だな。」

川田「彼らの努力によって、我々はドネルケバブすることができる。」

酒井「ははは。」

川田「手間暇かかっているんだ。このドネルケバブで使用する肉塊は、薄切りの肉を重ねることによって出来ているんだよ。」

酒井「丁寧だな。薄切りである理由はないんだ。」

川田「愚問だね。ドネルケバブの味付けは、『薄い肉1枚1枚をヨーグルト等の調味料に十分にまみれさせる。』これによって行われるからだよ。」

酒井「面倒じゃないか！厚い肉を使えよ！」

川田「たとえ手間暇かかったとしても、分厚い肉を使わない。薄切りの肉の方が、下味がしつかりとつくのさ。これにより、最高に美味しい肉の提供が可能。」

酒井「美味しいものを作るためには手間暇

を惜しまない。職人がここにいる。」

川田「さて、ここに最高の食材と、最高の職人が成立した。あと1つ、何が必要だと思う。」

酒井「え。ん。な、なんだ急に轟音が……！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ

川田「最高の食材は最高の機材で調理されなければならぬ。」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ

酒井「な、何だ。何かが空からこっちに向かつて。」

川田「さらばー、ドイツよー。たびだーつきみはー。ちょうりーきざいー、ぼーていーすー。」

ドスン！（着地音）

酒井「開いた口が塞がらない。」

川田「これがドイツPOTIS社のPOTIS GD・4Sだ。」

酒井「」

川田「POTIS GD・4Sに丁寧に下味がつけられた肉を、セットッ！」

川田「POTIS GD・4Sに妥協を許さない最高の職人を、配置ッ！」

川田「回すぜええっ！セイッ。」

川田がその器具を回した途端、肉塊は回転をはじめ、周囲に香ばしい匂いが広がる。ポテイスは肉を焼くための機材だったのだ。

川田「フフ、来たようだな。」



酒井「な、何だ。急に人だかりが！」

川田「食材、職人、機材の3つの神器。ここに、お客が集まる。頃合いか……。」

酒井「な、なにをする気だ？」

川田「ここに、国家、ドネルケバブの建国を宣言する。」

ケババーたち「うおおおおおおおおおお！！！」

第5部「建国」

酒井「ああ……、足が勝手に POTIS の方に。こ、このままでは俺もケバブ国の国民に。」

お客A「おい、ドネルケバブしね？」

お客B「ドネル！ドネル！」

お客C「……ケバブになろうよ。」

川田「勝利。哀れなり、タコス。」

ポテイスを軸に広がるケバブの波動に、酒井の気力は尽きかける。そのとき、彼の右手首にある腕時計が光った。

酒井「本部からの交信？」

ブルー「レッド！大丈夫か？」

酒井「ブルー！お前どうして？」

ブルー「本部でタコス力の弱まりを検知した。これより救援に向かう。」

川田「」

川田「誰だタコスブルーって！？」

酒井「三人いるタコスレンジャーの内の1人さ。」

川田「タコスレンジャーだとお！ふ、ふざけやがってえ！」

酒井、意味の解らないボーシングをはじめめる。

酒井「我々三人の力があれば、ケバブを屈服させることは容易！」

川田「たった三人で（笑）こっちにはケババー（国民）たちがわんざかいる。」

酒井「戦争はねえ、量じゃあない、質だ

よ君。」

川田「は？」

酒井「震えて待ちな。」

川田「そこまで言うなら待つてやるよ、タコスレンジャーたちをな。」

45分後

未だにあたりには、ケバブ国家元首川田と国民のケババーたち、そしてタコスレッドの酒井しかいなかった。

酒井「（どうした、なぜだ、なぜ来ない！） Emergency Emergency」

川田「（笑）」

酒井「違う、いつもはすぐ来るんだ！」

川田「うるさい。おい、お前ら、POTIS に縛り付けろ。」

ケババーA「ケババー」

ケババーB「エキメツキー。」

ケババーC「シュイインツ。」

酒井「うっうわああああ。何をやるやめろめる。」

POTIS には一本の棒が突き出ている。本来であればここに肉塊をセットし焼くのである。しかし、今ここにセットされたのは酒井であった。

酒井「こんな所に縛り付けていった何を……はッ。」

川田「POTIS のモーターを可動しろ。」

酒井「まさか、お前、俺をドネル（*ドネル・回転の意）するつもりかあ！やめろおお！」

モーターが、回り始める。

酒井「（レンジャーが揃えば無敵。今は耐え時だ。）」

川田「なにか言い残すことはあるかい？」

酒井「タコスは、永久にふめ……アニヨス！」

川田、サーベルを喉元にあてる。

川田「発言していいとは言っていないヨ。」

ケババーX「こんな奴、さっさとケバブにしちまいまししょう。ねえ、旦那。」

ケババーX、POTIS に火を付ける。

酒井「うわあああ、あついいいいいい、ままああああー。レンジャーD

モオオ、パストールはまだかあああ！うぎやあああああ！たすけてくれえええええ！ウゴス、アニヨス、ボヌ

スッ！ポウツ！」

その頃。タコスレンジャー本部

テレビ「うわあああ、あついいいいいい、ままああああー。レンジャーD

モオオ、パストールはまだかあああ！」
イエロー「や、やっべえぞブルー。」
ブルー「安心しろ。パストールの準備ができた。」

イエロー「出撃だ！で、ケバブ国はどこだ。」
ブルー「北関東だ。ゲンマーとか言ったか。」

ケバブ国

川田「待て、Xよ。謀反人を処罰する際、どれほどのドネルケバブが作れるかによって、罪状を決定する。これが国のルールだ。」

川田が酒井に歩み寄る。

川田「君は憎むべき敵だ。だが僕は、同時間にお前にケババーになって欲しいとも思っている。」

酒井「（これはチャンスだ。一旦ケババーになり、不意打ちを狙おう。）」

ケババーX「ケツケツ。灼熱への招待だ。」

サーチライトが酒井を照らす。

酒井「うわっ、サインが眩しい。」

川田「X、それを使うんだね。」

ケババーX「行ってらっしゃいませ。お2人さん。」

空間が揺らぎ、2人はワープした。

酒井「ど、どこだここは？」

川田「ドネルケバブを作る体験ができる、群馬県前橋市中央広場前さ。かつてXとケバブの契りを交わした想い出の地だよ。」

前橋中央イベント広場

酒井「45 D A Y S ～私たちの前橋～」

川田「それは表面に任せよう。僕たちはケバブを狙い撃つ。」

酒井「ハッ……！」

酒井の視線は、ドネルケバブの移動販売車を捉えていた。

酒井「あ、足が勝手に移動販売車へ

……！（演技をするんだ。）

川田「わかるよわかる（よい傾向だ。）

酒井「店の中を見てもいいか？」

川田「構わないよ。」

酒井「失礼。（よし、この設備を奪えばパストールを動かせそうだ。レンジャーたち、早く来い！）」

その頃、タコスレンジャーたち

ブルー「いやー、高崎で乗り換えとはね。」

イエロー「レッドから暗号通信だ。『ドネルケバブ屋台の設備でパストール起動可能。繰り返す、パストール起動可能！』

ブルー「よし、急ぎぞ！」

〇〇線「強風のため、列車が遅延しております。」

イエロー・ブルー「は？」

店員「コンニチワ！美味しいケバブアルヨ。オカネチャイダイダイ。ジャパニーズ

アニキ。Y E A H！」

川田「さて、ここで君の運命が決まる。精一杯やってみるといい。素人には、肉塊に切れ込みをいれることもままならないと思うがね。」

店員「カワダサン！」

川田「ウガンダ。今日はこいつにケバブ体験をさせてやりたくてね。私も久しぶりにやるつもりなんだ。少しの間、店を貸してくれないか。」

店員「コノミセハ、ローンヲクンデカッタ。ニヨウボウト、コドモニダマツテ。」

川田「いや知らないよ。」

酒井「よし、屋台の中に入るぞ。」

ウガンダ「ストオオップ！マズミセニオジギシナサイイ。」

酒井「す、すみません（オジギツ）。」

川田「一点減点……つと（カキカキ）。」

酒井の評価が下がった。

ウガンダ「マズ、シヨウドクスル。」

酒井「（アルコール消毒液プシュー）ふきふき。ほい。」

ウガンダ「モット。」

酒井「（プシュー）ふきふきふき。どうだ。」

ウガンダ「モットオオオッ！」

酒井「（プッシュューツ）ふきふきふきふき。どうだあ！」

ウガンダ「OK」

川田「（衛生面には気を遣う。これが飲食店の義務。）」

ウガンダ「コレツケテ。」

酒井「ふんっ、ふんっ（ビニール手袋を装着）。」

ウガンダ「ヨシ、ソコタツテ。」

酒井「よいしょつと……つておお。肉塊が回転してやがる！」

ウガンダ「コレト、コレヲ。」

酒井「はっこれは！」

酒井は、ケバブサーベルとケバブシヨベ

ルを装備させてもらった。

川田「シヨベルの中に肉を切り落とす。これができるきゃあ、真のケババーにはなれんぞ。」

酒井、指示通り、肉塊の回転をケバブシヨベルで止める。あとは、サーベルをあてがうだけ。

ウガンダ「GO、マサル。」
マサルが掲げたケバブサーベルが、淡く



▲ドネルケバブに入刀しようとする酒井。心なしか、ワクワクしているかのように見える。ちなみに、チキンである。

光った。

川田「ドネドネー♪」

ウガンダ「ケバケバー♪」

酒井「奇怪なメロディーだ。」

川田「ケバブ行進曲だよ。ドネルケバブに入刀する者を祝福するための曲さ。さあ、見せてくれ。君のケバブ力を。」

酒井「フンッ！」

酒井「はあっ！（あれ？）」

ウガンダ「カワダサン、コイツ、ケバブナメテルヨ。」

川田「そう怒るな。もう少し様子を見よう。」

酒井「く、クソ。いくら力を入れても、肉がまったくきれねえ！」

ウガンダ「コイツ、キンニクバカ、ケバブ、チカラジャナイ。」

肉が切れない。これは、ケバブサンドを作る以前の問題。肉塊を前に苦惱する酒

井を見て、川田がシャツを脱いだ。

川田「ハアアアアアアア！」

ウガンダ「す、すごい。カワダサンのケバブ力が、10000、12000、15000!!!」

川田「前に言ったね。罪状はどれほどのケバブが作れるのか否かで決定すると。君は論外。どうなるかは想像に難くない

だろう？」

酒井「ゴクリ……。」

川田「さようなら。」

ウガンダ「久しぶりに、カワダサンのア

レがみられるヨ！」

川田はスーパーケバブ人になった。いつもに増してムカつく顔、目に見えぬサーベル裁き。ケバブvsタコスに勝敗が付いたことを確信し、川田は酒井に、決着の握手を求める。

酒井「もうだめだ、おしまいだ……。」

—— タコレンジャーたち

ブルー「前橋駅についたぞ。」

イエロー「まってるよレッド。タコスは不滅だ！」

川田「さあ、君はもうおしまいだよ。何か言い残しておくことはあるかい？」

酒井「ケバブよ。」

川田「何だ？」

酒井「俺は、タコスの勝利宣言をする。」

川田「ここ、コイツ正気か？本来なら、僕の靴を舐めてでも命乞いをする場面。

君は崖っぷちだ。ここで反転し、俺と立場をいれかえる？無理だ。どう考えたつ

て俺の有利は覆らん。回転する肉、歯ごたえある肉、肉本来の肉。僕は、肉の差

で君に勝利してる。）

川田「は、ハッターだ！（震え声）」

川田は勝利を確信している。だがそれだけに、酒井の強気な言葉に動揺の色が。

酒井「貴様、動揺しているな？」

川田「少し前まで死相を浮かべていたの





に、「口数が増えたね。」

酒井「はっはっは。」

川田「なぜ笑っていられる？」

酒井「後ろを見てごらん。」

川田の背後には、ケバブ店主のウガンダを拘束し、ケバブ屋台を強奪したタコスレンジャーが。

川田「なんだお前ら！」

酒井「燃えるような赤きサルサ。」

ブルー「肉を受け止める野菜の美味。」

イエロー「すべてを包むトルティーヤ。」

酒井「三人揃って。メキシコ戦隊、タコスレンジャーだ！（テレッテー♪）」

イエロー「覚悟しろ川田！」

ウガンダ「カワダサン、コレ、ウマイヨ。」

川田「ウガンダどうした!? タコスなんぞ

くいやがって。」

酒井「レンジャーが持ってきた最強のタ

コスが、あまりに美味いからさ。」

川田「(ケババーであるウガンダが、タ

コスにむしゃぶりつくなど……。)」

酒井「レンジャーが降臨した。ケバブ。

覚悟せよ。」

酒井「決着をつけよう。」

川田「無駄だよ。ケバブの勝利はゆるぎ

ない。タコスとは肉が違う。肉が。」

酒井「イエロー、香辛料をふんだんに使っ

た調味液に、じっくり味が染みるまでい

たわるように漬け込んだ、最強の肉塊は

持ってきたな？」

イエロー「もちろんだ！」

川田「ちよ、肉塊はドネルケバブのもの

だよ。」

酒井「ブルー、ケバブ屋台から強奪した

機材の調子は？」

ブルー「(ミートを回しつつ、電圧・電

流・抵抗及びPOTISのOSをタコ

ス用に再設定…、チッ！無理か。なら

予備電源を起動し、本部のエイリアス

に再接続！肉塊をロックし、サルサを

保温。タコスネットワーク、再構築！

POTISパラメータ更新！モーター

正常。温度上昇。回転数・回転速度、許

容範囲内。システムオールグリーン。よ

し……！) いけるぜ。」

川田「さて。肉塊にPOTISだつて？

笑わせるな。それはドネルケバブ。そう

か！ケバブ側に寝返るんだね。(回転す

る肉塊といえば、ケバブの代名詞でしょ

う。)」

酒井「俺たちが作るのはタコスだ。ドネ

ルケバブと同じ手法で焼き上げた肉を、

トルティーヤに挟むのさ。」

川田「それケバブじゃん。」

酒井「料理名はタコスパストール」れっ

きとしたタコスだよ。」

ブルー「レッド、パストールあがったぜ。

『タコスの肉は離乳食のような挽肉だけ』

などとぬかしたうつけ者に思い知らせて

やれ。ケバブを上回る肉のうまみを！」

酒井「よし！」

酒井・川田「御託はあきた。肉弾戦だ！」

酒井はパストールを受け取り、ケバブを持った川田のもとへ。互いのタコス、ケバブが刀のようにぶつかり合い、あたりにはソースの火花が飛び散る。

あたりを包む、激しい衝撃と爆風。

タコスブルー「……どっちが勝ったんだ？」

視界が暗れると、あたりには真っ赤なサルサソースとドネルケバブのソースが飛び散っていた。

タコスイエロー「お、おい。レッド、どこだ？」

酒井（タコスレッド）と川田の姿はない。

ブルー「おいレッド……っ！」

地面の上で、赤く染まった酒井愛用のリストバンドが転がっていた。

回想

シャワー「シャワー……」

ブルー「レッド。そのリストバンド、風呂でくらい外したらどうだ？」

レッド「実はこれ重りなんだ。15kgあったな。」

ブルー「なっ。流石はリーダー。」

レッド「一流のタコスマイスターになったら外そうと思ってる。」

ブルー「（……俺はこの人にどこまでもついていく。）」

ブルー「う、うそだああ。」

頬に涙の筋が。

ブルー「まだ一流のタコスマイスターになつてねえだろ！」

ウガンダ「タコスウマウマ。」

ブルー「うそつくんじゃねえよっ！レッドオオッ！」

POTISが静かに、起動を停止した。

第6部「精神世界」

酒井「ん……。」

川田「ここは、どこだ？」

酒井「前橋じゃねえことは確かだ。」

2人の目の前には真っ白な世界が広がっていた。認識できるのは、己と相手の存在のみ。

酒井「パストールも消えちまったし、戦闘の継続は不可能か。」

酒井・川田「……。」

酒井「なあ。俺は一回お前とじっくり話してみたかったんだが。」

川田「今まで戦いばかりだったからね。」

酒井「せっかくの機会だ、対話をしようか。」



▲ハードタイプのタコスである。

か。」

川田「そうだね。……僕たちが闘いを始めたのは確か9月22日だったな。」

酒井「9月22日から、約一カ月か。」

川田「よくもまあ、そんなに戦い続けてきたな。」

酒井「まあ、全てがボクシングのような肉弾戦だったわけじゃないからな。緩急があったと思うよ。」

川田「そうね。確か最初君は『トルティヤを焼くタコス屋台のおじちゃんごっこ』なんて言って言ってたね。」

酒井「それはお前はシュウイン、シュウインなんぞと言ってきたな。」

川田「ああ、ケバブサーベルだ。」

酒井「そして、君の『あんな薄っぺらいタコスの皮にケバブサーベルをあてたら

一瞬で散り散りだろうな』発言。」

川田「ただ薄いわけじゃなかったんだよね。ソフトタイプとハードタイプだったよな。」

酒井「そうそう。2つのバリエーションを示してやったな、確か。」

川田「そして、対抗心からか、焦りからか、俺は早くも神髄を披露しちゃったんだよね。」

酒井「シシ」

川田「ケバブツ！」

酒井「肉だけを存分に味わおうっていうあれだな。」

川田「そして僕たちは和解の兆候を見せたわけだ。」

酒井「『君（ケバブ）と僕（タコス）は、似ているのかもしれない』ってな。」

川田「多分最初から飛ばしたから……」

酒井「戦うことに疲れちゃったんだよね。」

川田「……ふふ。」

酒井「そしてお互いの背景のメキシコ料理とトルコ料理について調べてみて、共通項なんて探してみただっけな。」

川田「すごい、一気に戦いが収束しているとしてるね。」

酒井「まあ、最初から、それはないって感じがしてたけどな。」

川田「君、それは禁句だよ。」

川田「君はメキシコ料理を語る上で、主

食はトルティーヤ。サルサは国民食だと言ったね。」

酒井「トルコ料理の主食はエキメッキ―だっけか。」

川田「うん（正式にはエキメッキな）。あとヨーグルトが頻出とも言った。」

酒井「トルティーヤと、エキメッキ。」

川田「サルサとヨーグルト。」

酒井・川田「全く似ていない！」

川田「僕たちはアホ。」

酒井「両者似ている・引き分けなどという、安易な結論に導こうとして、いや導けなくて、このありさまだ。」

川田「それで、もう一度兜の緒を締め直す。」

酒井「お前がブリトーを葬り去ったせいだな。ブリトーの恨み、消えてないからな。」

川田「……。」

酒井「そしてタコスとドネルケバブの構成要素ごとに競うことになった。」

川田「最初は皮だね。」

酒井「バリエーションあふれるトルティーヤがピタに勝利！タコス、皮部門勝利。」

川田「次は野菜決闘ベジタブルデュエル。」

ね。」

酒井「にしてもこの勝負、メキシコとトルコが、いかに野菜の原産地に近いかで決まるなんて。」

川田「トマトの原産地はメキシコの方が近くて、レタスはトルコの方が近かった。」

酒井「キャベツは引き分けだから、1勝1敗1分け。」

川田「結果、野菜部門は引き分けだったね。」

酒井「そしてお互い絶対に譲れない、肉部門の勝負へ移行する。」

川田「僕はタコスに使われている挽肉を非難した。」

酒井「だが、俺にはそれを跳ね返す切り札があったんだ。」

川田「まさかタコスの中の肉が挽肉だけじゃないとは。」

酒井「そっちはテクスメクス。」

川田「本場の肉はゴロゴロ……！」

酒井「お前が推していた肉の歯ごたえが効力をなさなくなってしまったな。」

川田「僕はもう限界だった。」

酒井「だから三種の神器を使ったんだね。」

川田「少し勝負を焦りすぎた感があるけどね。」

川田「それはどうも。」

酒井「だから僕も切り札を切ろうと思つて、奴ら呼んだ。」

川田「なかなか到着しないあいづらね（笑）。」

酒井「ええい！あいづら、許さん！」

川田「まあまあ。」

酒井「だって、あいづらが来るのが遅れたせいでPOTISに碟にされたんだぞ。」

川田「もう少しでドネルケバブになつたね。」

酒井「しかし、俺がどれほどのドネルケバブを作れるかを見るために、それを解除。前橋に移動した。」

川田「うん。君、下手くそだ……、あ、刑の執行が途中だったね（忘れてた）。」

酒井「俺は、ブリトーの仇をうたなきやならない（忘れてた）。」

川田「俺たちは」

酒井「やはり」

酒井・川田「もう一度戦わなければならぬ。」

二人の意志が、静止していたPOTISを動かす。

イエロー「なんだ！」

次の瞬間、酒井と川田、両人が再び出現した。

酒井（レッド）「ブリトーの仇だ。パストールを起動しろ！」

川田「来い、刑を執行する。」

ブルー「待つてくれ、アイツが、アイツが生きてたんだよ！」

ブルーが指さす方向を見ると、そこには……。

酒井「ブ、ブリトー……！」

酒井「な、どうして……。」

酒井の視界には、一度とろけて固まったであろうチーズを引きずりながら、こちらに向かってくるブリトーが。

酒井「なぜ生きている！」

ブリトー「延命措置をしたのさ……。」

酒井「何……？はっ、お前、皮は、トルティーヤはどうした！」

ケババーX「今のブリトーの皮は、ピタでケバ。」

川田「ケババーX。どうしてここにいる？」

ケババーX「目的を達成するためでケバ。」

ブリトー「この不毛な戦いを、終わらせに来た！（ドン！）」

川田「待て。X！どういふことだ、お前の皮もおかしいぞ！」

ケババーX「トルティーヤでケバ。」

川田「愚かなことを……。」

ケババーX「……川田様がブリトーを瀕死に追いやりました。私がかけたと

き、ブリトーは損傷が激しく、助からない運命でした。」

ブリトー「私は彼に頼んだ。このボロボロのトルティーヤでは生きられない。代わりにピタで包んで延命させてくれないかとね。」

酒井「宿敵ドネルケバブのピタを使うとは……。」

ブリトー「ピタを使って延命できたとき、気付いたんだ。やはり、タコスとドネルケバブは共存できる。」

ケババーX「私はブリトーから説得された。2人をタコスとケバブの戦いを止めよう。そして、心打たれた。」

川田「それでお前は皮をトルティーヤにしたわけだな。」

ケババーX「身をもつて本気度を示したかったんだケバ。時に、パストールとやらはドネルケバブと同じように肉塊を回しているケバな。」

酒井「ああ。」

ケババーX「君は、タコスがケバブのアイデンティティを奪ったと考えているかもしれないが違う。」

ケババーX「パストール、あれはすごいでケバ。」

ブリトー「ドネルケバブと同じように肉塊を回しつつ、同時にパイナップルや玉ねぎもドネルすることができるからね。」

酒井「そうだ、そうだ。パストールは、タ

コスは、すごいんだ、すごいんだ。」

ブリトー「これで、タコスとケバブ、肉を回すという点で同じになったわけだ。」

川田「そういえばそうだね。」

ケババーX「でも、タコスはドネルすることによりドネルケバブのアイデンティティを奪ったんじゃない。」

酒井「？」

ブリトー「タコスはドネルすることによりタコスとドネルケバブ両者のアイデンティティを喪失させ、1つの存在に近付けたんだ。」

酒井「はつつ……はい？」

ケババーX「そもそも『皮』だとか『野菜』部門ごとに対決できる時点で察するんだケバ。」

ブリトー「同じ要素に分解できるんだ。お前らは見てくれば違うかもしれないが、実は根っここのところで似通った部分がある。」

川田「……。」

ブリトー「よく頭を冷やせ。お前たちは戦うべき存在じゃない。手を取り合うべきなんだ。」

ケババーX「手を取って倒すべき大勢の敵が、この群馬県内にいるだろケバ！」

酒井「ち・が・う！似ているからこそ、決着をつけなきゃいけないんだ！」

川田「しゅ、しゅうういいん。」

ケババーX「どうしたんだこいつら？」

ブリトー「今まで自分たちがやってきたこ

とを全否定されたんだ。発狂したくもなるさ。」

ケババーX「やはりことばだけじゃだめか。」

ブリトー「お前ら、遠征してこいーそこで倒すべき敵もすべて分かる。」

酒井・川田「遠征？」

しぶやう。しぶやう。

酒井「来ちまったな。」

川田「見ろよ、100があるぜ。」

酒井「まさに都会って感じだな。」

第7部「ドネドネドネル、東京に行く。」

川田「で、ここで何をしろって？」

酒井「ケババーXからメモを預かった。」

川田「読んでくれ。」

ケババーメモ

酒井さん、川田さん。私とブリトーはドネルです。メキシコ、トルコでいがみ合っている場合ではありません。視野を広く持ちましょう。お二人が手を組めば、世界征服も夢ではありません。Come trueでケバ！

そんな世界を切に望む私が、『タコス、ケバブ仲良しプラン』を立案しましたケバ！」

川田「ストップ！なんだよ、私とブリトー

はドネルですって！」

酒井「ドネルで繋がって、理解しあつたてことじゃない？」

ケババーメモ「渋谷着いたらまずはタコペルに行くケバ。」

酒井「どこだ？地図が不鮮明でよくわからん。」

川田「駅から徒歩5分だよ。」

酒井「適当に歩くか！」

30分後。

川田「ゼエツ、ゼエツ。」

酒井「つ、ついたぞ！東京つてのは恐ろしい街だよ。同じ場所をくるんくるんして、やっと目的地に着いた。」

川田「この、方向音痴が！」

酒井「ここがタコペルか。うんめえええええ。」

川田「堪能した！次行くぞ次！」

ケババーメモ「タコペルの次は、マモ・ケバブへ行くケバ。」

酒井「どこだ？」

川田「ケバブの芳しい香りを感知した。こつちだ。」

酒井「おい、あいつのサーベルさばきやヴェ



え！」

川田「ケバブもやんべえほどうんめえ！」

酒井「川田、俺と、五分のドネルを交わし

てくれるな。」

川田「もちろん。」

二人は、手を取り合った。

酒井「戦いはやめだ。」

川田「これからは、」

酒井・川田「タコケバになろう！」

酒井「皮で肉を、野菜を包み、辛めのソースで味わう。」

川田「その点において完全に一致している

酒井「そういえば、俺たちは今まで何と、

酒井「使われている具のわずかな差異な

何で戦ってきた？」

ど、」

川田「そ、それは。」

酒井「肉？野菜？皮？もう分からないよ。」

川田「誤差の範囲内だ！」

川田「これからどうする？」

酒井「俺たちは、二人で一つの……！」

酒井「俺は、お前の美味さを、ピタに包ま

酒井・川田「包肉皮物だ！」

れた素顔を知っちまった。全力で殴り合い、

酒井「貴様にも見えているな。」

君と分かりあった気がする。もう、よそう。」

川田「ぼくらが倒すべき敵、それは……。」

酒井、振り上げていたタコスを下ろさせる。

酒井「せーの。」

川田、落下していたタコスをソフトに包み

酒井・川田「パンケーキ！」

込む。

川田「ですよ〜(笑)。」

川田「僕もね。このトルティーヤが、ティー

川田「さて、最近流行っているらしいパン

ヤが、愛おしい。愛してるよ。ティーヤさ

ケーキだが。」

ん！君を傷つけられない。」

酒井「パンなのか、ケーキなのか良く分か

川田、タコスを抱えつつその場に泣き崩れ

らん、間抜けな響きだ(笑)」

る。

川田「タコケバの餌食さ。」

酒井「俺たちは似ている。」

酒井「まず、やつらが使うのはせいぜい、

川田「似ているから戦った。互いに、ただ

チョコソースがいいところだ。」

一つ。唯一の存在になることを望んだ。」

川田「サルサ、サルサ。」

酒井「で、でも！」

川田「僕たちは、共存すべきだ。」

酒井「勝利。」

川田「パンケーキはそれ単体で機能しない。アイスや、ハムの助けが必要だ。」
酒井「シシケバブ、シシケバブ。」
川田「勝利。」

酒井と川田は、様々な要素をあげつつ、タコケバの方がパンケーキよりも優れていると確信する。

酒井「ではなぜ、奴らは流行っているのか。」

川田「可愛さと、オシャレさかな？」

酒井「は？タコスちゃんだって、こーんなにかわいいでちゅよー。」

川田「タコスにケバブ。見た目には、若干の攻撃性があると思うよ。」

酒井「パンケーキは丸くてかわいい。チョコペンのペイントなんかもキュートだ。」
川田「それに、パンケーキはオシャレなお店で食べるものらしい。」

酒井「は？エンターテイメントに富んだ移動販売車こそ正義だ。」

川田「そこに落ち着きはあある？」

酒井「なに？」

川田「ケババーXに密偵させたところ、パンケーキ屋というのは、カフェ風の店内でコーヒー片手に楽しむものらしい。」
酒井「なるほど。味はタコケバの勝利だろうが、その点で負けているのかも。」
川田「ではどうするか。」

酒井「パンダ・タコスでも作って、オシャレなカフェ風に、可愛く提供。そんな店

を作ればいいんだな？」

川田「パンダはなんでも可愛くするからね。それを常設のお店で売ることができれば、パンケーキは一瞬でスパークさ。」
酒井「マカロンを知っているか？」

川田「なんだそれは(笑)。ワカラン。」

酒井「イタリアやフランス、ヨーロッパの方で広まったお菓子だ。」

川田「ドネルケバブ地方だね。」

酒井「サクサクの焼き菓子で、例えるならクッキーのようなイメージ。」

川田「焼き？」

川田はドネルを始めようとする。

酒井「落ち着け。君はすぐ肉塊を回転させる癖がある。悪い癖だ。」

川田「失礼、『焼』の字を聞くとつい身体がね。んで、そんなマカロンがどうかしたの？」

酒井「純粹にムカつくんだ。」

川田「その心は。」

酒井「あんな、口の中の水分を全てさらっていく、モッサリ食感の固形物が(笑)。」

川田「おいおい、調べてみたら、パンケーキ並みに人気じゃないか。」

酒井「そうなんだよ。パンケーキと同じく、東京で流行り出し、地方にもその風を吹かせるマカロン。」
川田「ムカつきの源泉がわかったよ。」
酒井「タコケバで潰す。」
川田「マカロンはクッキーの進化版みた

いなやつで、カラフルなバリエーションに富む。」

酒井「カラフルなトルティーヤを焼けばいいんだね？勝利。」

川田「ちと高いな。その割に小さい。」

酒井「ドネルケバブのコスの前に、成すすべもない。」

川田「ではなぜ人気が？」

酒井「可愛さ(笑)。」

川田「またそれか。」

酒井「そう言うな。デザート、スイーツ路線というのは、タコケバに足りない要素だよ。」

川田「我々の天下統一が、そういった部類の食品に妨げられるとは。」

酒井「ここは一つ、スイーツとしてのタコケバを提案して勝利を狙おう。」

川田「実に邪魔な奴らだが、彼らのお株を奪い、天下を取る！」

川田「とにかくスイーツは見た目だね。」

酒井「マカロンはカラフルだったな。」

川田「赤、黄、緑、白。」

酒井「サルサソースの赤。トルティーヤとピタの黄色、タコスとドネルケバブの豊富な野菜の緑、ヨーグルトソースの白。」
川田「タコケバカラフル！これを白いプレートの上によれば……。」
酒井「あれだろ。そのプレートはやけに大きくて、その真ん中にちょこん、っ

てタコケバを置くんだろう。」

川田「器を大きくすることで、そこに置いてあるタコケバを小さく見せる。」
酒井「なにこれ！ちいさ！いか！わ！い！く！。」

川田「スマホでパシャッ。SNSに投稿。」

酒井「若者対策に余念がない。完璧だ。」

川田「後は持ち帰りなら、包装を工夫できる。」

酒井「包装紙をカラフルにするのか。」

川田「何色の包装紙で包まれるのかなというワクワク感を、そこに。」

酒井「よし、これで大丈夫だな。」

川田「……。」

酒井「どうした、浮かない顔して。」

川田「デザートは、食後に食べるだろ？一通り食事をすました後食べられるのは、甘さが関係しているはずだよ。」

酒井「うん。」

川田「もし、肉料理を食べた後に、もう一度肉が入っているタコケバをスイーツとして食べようと思うかな？」

酒井「しょっぱいのはダメ？」

川田「食事の最後は甘いものが適役では？」

酒井「そんな彼らにはこれ。デザートタコスのタコスアイス。これはフルーツやアイスをトルティーヤ等の皮で包んだもの。」
川田「……ほんつと、タコスの皮は憎い

よ。」
酒井「タコケバはしょっぱさも甘さも兼ね備えている。向かうところ敵なしだな。」

酒井「さて、そろそろ群馬上陸作戦の準備は整ったんじゃないか？」

川田「ほほう。」

酒井「タコケバはパンケーキとマカロンとの戦いでパワーアップした。今や敵はいないさ。」

川田「待って、群馬の雄を忘れてない？」
酒井「ん？」

川田「甘じょっぱくて、ポリューミーな群馬のソウルフードだよ。」

酒井「あ、焼きまんじゅうね。」

(ケババーX「ちなみに酒井と川田は群馬県民ではないケバ。」)

川田「奴の牙城を崩さない限り、タコケバは群馬の地に根づくことはできないだろう。」

酒井「強敵なのは分かってる。だが、狙い撃つ。」

川田「今のタコケバの力を試してみたいよな。やってやるか。」

再び前橋の中央広場

焼きまんじゅう「……。」

酒井「ずっと待っていたのか。」

酒井がトルテイヤを構える。

川田「本当に、待たせたな。」

川田がケバブサーベルを構える。

酒井「目標を！」

川田「駆逐する！」

勢いよく向かった二人だが、焼きまんじゅうに触れることさえできない。

酒井・川田「ぐわあああああああ。」

焼きまんじゅう「……。」

酒井「ここは……？」

川田「あれ、地面に俺たちの身体が。つていうか俺たち浮いている。」

酒井「ほんとだ。俺たち、敗北したんだな……。」

川田「ダメだったね。でも敵ながらあっぱれた。」

酒井「主食・デザートとの顔を持っていたし、食後の満足感よ。」

川田「何より、日本人好みの味よ。」

酒井「……うっ、っ。ぐっ、ぐっ……。」

川田「泣くな。最後は胸を張ろう。」

酒井「そ、……っ。そうだな。それにタコケバの意志を継ぐ者が、必ず現れる。」

その場はすすり泣きと、嗚咽で満たされていた。

ケババーX「酒井と川田はもういないケバ！彼らの意志を継ぐのは残された君たちで……。」

Xが演説を始めた刹那、味噌の甘い匂い



が鼻を突き刺し、線香の香りをかき消した。

ウガンダ「敵襲！敵襲！」

ケババーX「ケバツ？」

ウガンダ「パターンGUNMA、焼きまんじゅうデス。背後におつきりこみも確認。やばいヨやばいヨ。」

タコケバーA「そんな……。」

タコケバーB「お二人抜きでどう戦えば！」

ケババーX「うろたえるな。ブリトリーにスクランブルをかけるケバ！」

第一格納庫

ブリトリー「信号をキャッチ。明太チーズ

シルエットで出撃します。」

ケババーA「システムオールグリーン。発信、どうぞ。」

ブリトリー「チーズ解放。とろけまあす！つて、これは、まさかみそらああつ！」

ジユドオオオン。

第一格納庫、ブリトリー出撃と同時に味噌にまみれる。再起不可能。

第二格納庫

博士「レンジャーたちよ、これが最後の戦いじゃ。」

イエロー「弔い合戦か。」

ブルー「レッドの意志は俺が継ぐ。」

イエロー・ブルー「バーストール発進。」

ブルー「ん？何か切り込んでく……おつきりこみらああああつ。」

第二格納庫はおつきりこまれた。そこに流れ込む無数の焼きまんじゅうの軍団。

本部

警告音「ケバケバケバ×2ドナー×2」

ケババーX「何事ケバツ？」

タコケバA「第2格納庫全壊。本部への侵入許しました。」

ケババーX「奴らは何をやっている。こ

うなったら私が出るケバ。」

焼きまんじゅう工作員「手を挙げる！」
ケババーX「なっ。」

焼きまんじゅう工作員「手を挙げる、ここまでだ。」

ケババーX「ちい。ここまで侵入されたケバか！」

Mr.焼きまんじゅう「タコケバ、全くおそるに足らず。」

ケババーX「防衛を任せたウガンダは？」
焼きまんじゅう工作員「こいつのことがい？」

ウガンダ「ヤラレタヨ。」
味噌にまみれたウガンダ。

ケババーX「くそ！先制攻撃ケバ。喰らえ！」

一直線に放ったサルサが直撃する。
ケババーX「やったか？」

Mr.焼きまんじゅう「かゆい。」
ケババーX「く……。」

Mr.焼きまんじゅう「最後の忠告だ。故郷に帰れ、タコケバ。」

ケババーX「嫌だ！」

Mr.焼きまんじゅう「ならばここで地球上のチリになるがいいわ！」

ケババーX「タコス天満宮ケバ大明神。我に力を！」

Mr.焼きまんじゅうの串から無数の焼きまんじゅうが放たれた。ケババーXのトルティーヤ・ピタ・ケバブ・サルサが徐々に味噌にまみれていく。

ケババーX「こ、ここまでか。」

——天国

酒井「おい、ケババーXがやばい！」
川田「……。」

酒井「本当は足がうずくんだろう？」
川田「知らないよ。僕たちはもう、あの日あの場所には戻れない。」

酒井「腐ったな。川田よ。」
川田「う、うるさい！」

酒井「タコケバに対する情熱を忘れたのか？」
川田「忘れるわけないだろう！でも、僕たちにできることなんてもう……。」

酒井「まだ手はあるはずだ！諦めるな。絞り出せ、ソースに脂を。切り落とせ、重ねてもはみ出すケバブを！」

川田「……。」
川田は再びサーベルを握った。

酒井「その表情、久しぶりに見ただ。Long time no see!」

川田「うるさい。大明神のもとへ急ぐぞ。」
酒井・川田「大明神！今一度、生命の躍動を与えたもうええええ！」

大明神は彼らの願いを聞き入れた。二人の魂は宇宙、異次元、神社のすげ深い森を浮遊し、現世、ケババーXのもとへと舞い戻る。

Mr.焼きまんじゅう「これで、おわりだあああ！」

酒井「お前がな。」
酒井はシャツを一枚脱いだ。シライ・キムヒフン・ユルチェンコ三回ひねりをきめつつ、噴出する味噌だれをトルティーヤで包み込み、それをthrow away。」

酒井「これが、すべてを包み込む奥義、『包みの極み』だ。」
川田「F難度だね。さしずめ、『ドネル・F・タコケバ』といったところか。」

酒井「君も見せてやれ。修行の成果を。」
川田「ドネル・ドネル・ドネル！」

——タコケバ本部

Mr.焼きまんじゅう「これで、おわりだあああ！」

酒井「お前がな。」
酒井はシャツを一枚脱いだ。シライ・キムヒフン・ユルチェンコ三回ひねりをきめつつ、噴出する味噌だれをトルティーヤで包み込み、それをthrow away。」

酒井「これが、すべてを包み込む奥義、『包みの極み』だ。」
川田「F難度だね。さしずめ、『ドネル・F・タコケバ』といったところか。」

酒井「君も見せてやれ。修行の成果を。」
川田「ドネル・ドネル・ドネル！」

川田は右足を軸に猛スピードで回転し、身体に炎をまとう。そう、彼自身が熱源となることで、半径50m以内にあるものをすべてケバブにしていぐ。

川田「これが『回転の極み』。」
酒井・川田「包、回転。両者の極が、ここに揃った！」

川田が作ったケバブを、酒井がひたすら皮で包み、Xに託す。

酒井「キメロオ、Xウツ！」
ケババーX「うおおおおお！」

酒井・川田「かませ！サンドネルムーンライトエクスプロージョン！」

爆風。焼きまんじゅうは美味みに倒れた。Mr.焼きまんじゅう「う、うまい。美味す

ぎる。撤退！」

ケババーX「終わった？のか。」

——数日後、天より

酒井「むしゃむしゃむしゃ。」
川田「まーたタコケバ食いやがって。」

酒井「だってさー、美味いんだもの。」
酒井・川田「タコケバの、味に魅せられ、45 DAYS。」

タコス、ケバブ、似ている。ゆえに噛み合い、ゆえに一つになった。タコスvsケバブ、ここに完結する。

THE END

